

2026 年度 授業計画(シラバス)

学 科	言語聴覚士学科昼間部		科 目 区 分	専門分野	授業の方法	講義
科 目 名	吃音		必修/選択の別	必修	授業回数(単位数)	15 (1) 時間(単位)
対 象 学 年	2年生		学期及び曜時間	後期 集中	教室名	第4校舎301
担 当 教 員	岸村	実務経験と その関連資格				
《授業科目における学習内容》						
吃音についての基礎的知識を理解し、対応方法や訓練方法について学ぶ。						
《成績評価の方法と基準》						
学期末テスト(筆記試験)において60%以上の得点をもって合格とする。						
《使用教材(教科書)及び参考図書》						
教科書:都筑澄夫編著「改訂吃音」建帛社 参考図書:都筑澄夫編著「間接法による吃音訓練 自然で無意識な発話への適及的アプローチ」三輪出版						
《授業外における学習方法》						
テキストを読み、予習・復習をしておくこと。						
《履修に当たっての留意点》						
吃音は、表面に出ている症状だけでなくその背後にある症状も理解し、心理的側面を考慮しながら対応する必要があります。吃音者特有の価値観・考え方や吃音悪化要因を理解し、効果的な対応や訓練ができるように、事例を交えて講義します。						
授業の方法	内 容			使用教材	授業以外での準備学習 の具体的な内容	
第1回	講義形式	授業を通じての到達目標	吃音症状と当事者の苦悩について理解できる	プロジェクター		
		各コマにおける授業予定	教科書を用いた講義とグループワーク			
第2回	講義形式	授業を通じての到達目標	吃音の種類、発生率、自然治癒率、原因論について説明できる。吃音症状、進展段階、吃音悪化要因の説明ができる。	プロジェクター スピーカー	(予習課題)「改訂吃音」 p8～17、p18表2-4、p83 図4-3、p94表4-4、「間 接法」p2～27	
		各コマにおける授業予定	教科書を用いた講義とグループワーク 症状の動画視聴			
第3回	講義形式	授業を通じての到達目標	直接法と間接法の違い、RASS(自然で無意識な発話への適及的アプローチ)、環境調整法について説明ができる	プロジェクター スピーカー	(予習課題)「改訂吃音」 p36～42、p48～73、「間 接法」p30～87	
		各コマにおける授業予定	教科書や資料を用いた講義とグループワーク			
第4回	講義形式	授業を通じての到達目標	吃音質問紙の情報を分析できる	プロジェクター	(予習課題)「改訂吃音」 p48～63、「間接法」p58 ～87	
		各コマにおける授業予定	教科書や資料を用いた講義とグループワーク 小テスト1回目			
第5回	講義形式	授業を通じての到達目標	小児の症例を通じて、環境調整法の実際の流れを説明、指導ができるようになる	プロジェクター	(予習課題)「改訂吃音」 p48～63、「間接法」p58 ～87	
		各コマにおける授業予定	小テスト1回目のフィードバック 教科書や資料を用いた講義とグループワーク			

授業の方法		内 容	使用教材	授業以外での準備学習の具体的な内容
第6回	講義形式	授業を通じての到達目標 メンタルリハーサル法の目的、導入について説明できる	プロジェクター	(予習課題)「改訂吃音」p78～121、「間接法」p90～103
	各コマにおける授業予定	教科書や資料を用いた講義とグループワーク 小テスト2回目		
第7回	講義形式	授業を通じての到達目標 成人症例を通じて、メンタルリハーサル法の流れ、および対立内容について説明・作成できる	プロジェクター	(予習課題)「間接法」p144～164
	各コマにおける授業予定	小テスト2回目のフィードバック 教科書や資料を用いた講義とグループワーク		
第8回	講義形式	授業を通じての到達目標 臨床の一連の流れを説明できる 症例からの様々な質問に対応できる	プロジェクター	
	各コマにおける授業予定	教科書や資料を用いた講義とグループワーク		
第9回	講義形式	授業を通じての到達目標		
	各コマにおける授業予定			
第10回	講義形式	授業を通じての到達目標		
	各コマにおける授業予定			
第11回	講義形式	授業を通じての到達目標		
	各コマにおける授業予定			
第12回	講義形式	授業を通じての到達目標		
	各コマにおける授業予定			
第13回	講義形式	授業を通じての到達目標		
	各コマにおける授業予定			
第14回	講義形式	授業を通じての到達目標		
	各コマにおける授業予定			
第15回	講義形式	授業を通じての到達目標		
	各コマにおける授業予定			